

昨日、二年ぶりに東京に出かけた。そして今日、午前中の飛行機に乗って戻り、今は空港の駐車場に止めていた自家用車で帰っている。

ほとんどとんぼ返りだ。我ながらどうかと思う。

帰ってくる日はとくに決めていなかった。連休が終わるまでに帰ってくればいいと言われていたし、飛行機に乗っている時はなつかしい各地を周ろうとも考えていたはずだったから、少なくとも三日ほどは滞在するつもりではいた。

しかしいま、二十四時間が経過し切るかどうかという早さで家に戻ろうとしている。

窓を開ける。潮風が香る。清々しく、落ち着く。喧騒はない。

ラジオの音がとてもなつかしく、愛おしく感じるのはなぜだろう。

海岸線を走る。気持ち之急いで、車の姿の無い直線道路では法定速度という定義を忘れた。四十分ほどまっすぐ走り続け、やっと山の方に曲がる。そこからは法定速度を遵守した。猫の額ほどの広さの田んぼを過ぎ、丘を抜け、森を進み、今の住処のある平地に入る。

ほっと息が漏れた。間違いなく安心からだ。やはり都会は肌に合わないのだと実感させられる。

広々とした田園風景の中に点々と建つ家が見えるだけ。高々としたビルも、洒落た飲食店もない。服屋もCDショップもない。ここには「ない」ということが「ある」。ルバイヤートの一節と同じことを思う。

ラジオを消し、窓を開ける。

稲を揺らす風がこちょい。潮風のようなわかりやすい香りはない。ただただ落ち着かされる。

とくに理由もなく、自分の居場所はここになったのだと、改めて実感する。

アパートにそのまま帰る気にはならなかった。おそらく、アパートに戻ってもいいような気がした。

今日は良い天気で、ピクニック日和だった。

ハンドルを捻り、川沿いの道に入る。先の方に赤い橋が見える。近づく途中で「ああやっぱり」というつぶやきももれた。おれはとてもうれしかった。

草の上で仰向けになっていた彼女は、上体を起こさなのまま腕だけを上げてこちらに向かつてゆっくりとおおきく振ってきた。

さらに笑顔がふかくなつた。愛情は滝のように湧いた。

やがて彼女のすぐそばで車を止め、なるべく表情を正してから降りた。

「ずいぶん早いお帰りだったね。なにかあった？」その問いに否定を返すと「じゃあなんで？」とさらに質問を渡してきた。おれは悩んだ。言うべきかどうか。言いたくはある。もちろん。

しかし困らせてしまうのではないかという考えが今になって急に浮いた。言ったら言ったで困惑させてしまうのではないかと思った。だけど言った。「君と一緒にじゃなきゃ意味がないから」

